

資料 1

管理栄養士・栄養士の栄養学教育モデル・コア・カリキュラム策定の背景と基本方針

1. 社会の変遷への対応

現在、食生活の多様化に伴い、栄養素等の不足から過剰までさまざまな問題を抱え、生活習慣病の増加、社会生活を営むために必要な機能の低下等、健康課題は多様化、深刻化している。家庭における共食機会の減少、日本の伝統的食文化継承の危機、食の安全への不安、食物供給の過度の海外依存等、栄養・食生活をめぐる課題も多様化している。こうした社会情勢の中、管理栄養士に求められる役割も、高度化、複雑化、多様化してきている。

各養成施設における管理栄養士・栄養士教育においては、これらの社会の変遷に対応し、管理栄養士・栄養士として必要な資質・能力を備えた質の高い人材を要請するために、教育課程の内容の充実を図ることが求められている。

2. 現行の管理栄養士・栄養士教育における課題とモデル・コア・カリキュラム

平成 12 (2000) 年、国民の健康問題や少子高齢化社会における様々な問題を改善できる高度な専門的知識および技能を有する管理栄養士の育成を目的とした栄養士法の改正が行われた。改正には管理栄養士の国家試験受験資格の見直しが含まれ、その影響もあり多くの栄養士養成施設が管理栄養士養成施設へと変わった。平成 7 (1995) 年までは全国で約 30 校程度であった管理栄養士養成施設が平成 30 (2018) 年には 150 校に届くほど養成施設の数が増えた。また、毎年約 1 万人の者が管理栄養士国家試験に合格し新たに管理栄養士名簿に登録されている。

厚生労働省では、栄養士法改正により管理栄養士の業務が明確化されたことをふまえ、法改正の趣旨に基づき管理栄養士として必要な知識および技能について評価できるよう、平成 14 (2002) 年に「管理栄養士の国家試験出題基準 (ガイドライン)」を改正・公表した。その後、平成 22 (2010) 年に、平成 14 (2002) 年以降の学術の進歩やこの間の法・制度など社会的変化に対応できるよう改正が行われ、以降、4 年毎に改正が行われている。

厚生労働省の「管理栄養士の国家試験出題基準 (ガイドライン)」は、「管理栄養士としての第一歩を踏み出し、その職務を果たすのに必要な基本的知識および技能についての的確に評価するという観点から、出題のねらいについては、国家試験で問うべき主要なものとし、そのねらいに沿って内容を精査し見直した」ものであり、「管理栄養士養成課程の教育で扱われるすべての内容を網羅するものではなく、また、これらの教育のあり方を拘束するものではない」とされている¹⁾。

しかしながら、現行の管理栄養士養成課程では、国家試験出題基準 (ガイドライン) を満たし、試験に合格させることを第一義とした教育が行われがちであり、養成施設の教育の内容および質に関して、学校間格差が見受けられる現状にある。

一方、日本栄養改善学会では、学術団体として独自に「管理栄養士養成課程におけるモデル・コア・カリキュラム」の検討を行ってきた。なぜなら、教育課程は本来、その専門職のコア・カリキュラムに基づ

いて設定されるべきもの、との考え方による。平成 15 (2003) 年より「管理栄養士養成課程におけるモデル・コア・カリキュラム」の検討を開始し、平成 21 (2009) 年に発表した。その後、栄養・食に関わる社会制度の変化や「栄養管理 (Nutrition Care)」の国際標準化などの動きを考慮した再検討を経て、平成 27 (2015) 年に、「管理栄養士養成課程におけるモデル・コア・カリキュラム 2015」²⁾の提案を行った。

1) 厚生労働省:管理栄養士国家試験出題基準 (ガイドライン) 改定検討会報告書. 2015

<http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10901000-Kenkoukyoku-Soumuka/0000075487.pdf>

(平成 30 年 1 月 8 日アクセス)

2) 特定非営利活動法人日本栄養改善学会:「管理栄養士養成課程におけるモデル・コア・カリキュラム 2015」

http://jsnd.jp/img/model_core_2015.pdf (平成 30 年 3 月 12 日アクセス)

3. 他の医療系職種におけるモデル・コア・カリキュラムの検討

他の医療系職種、例えば、医師、歯科医師、看護師、薬剤師では、国がモデル・コア・カリキュラムの検討を行い、公表している。

医師・歯科医師においては、平成 13 (2001) 年から、文部科学省高等教育局の下、医学および歯学教育モデル・コア・カリキュラムの検討が行われ、平成 19 (2007) 年には、医学教育モデル・コア・カリキュラムおよび歯学教育モデル・コア・カリキュラム改訂に関する恒久的な組織として連絡調整委員会・専門研究委員会が文科省高等教育局に設置され、検討が繰り返されている。直近では、平成 28 (2016) 年 3 月から開始された検討結果が、平成 29 (2017) 年 3 月に「平成 28 年度改訂版」³⁾として公表されている。その基本理念と背景の解説の最初に、キャッチフレーズは「多様なニーズに対応できる医師の養成」であり、それを目指して取りまとめたと記されている。また、「今後、医師以外の各職種においても、モデル・コア・カリキュラム等の策定や改訂が行われると想定されるが、チーム医療等の推進の観点から、例えば本改訂において歯学教育との間で「求められる基本的な資質・能力」において試みたように、医療人として共有すべき価値観を共通で盛り込むなど、卒前教育の段階でより整合性のとれた内容となることが重要」と示されている。

3) 医学教育モデル・コア・カリキュラム (平成 28 年度改訂版)

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/06/28/1383961_01.pdf

(平成 30 年 3 月 12 日アクセス)

看護師、保健師、助産師など看護系人材の看護学教育では、昭和 49 (1974) 年より文部科学省で、大学における看護教育に関し様々な検討が行われてきている。最近では、平成 23 (2011) 年に「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会」報告として、「学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標」が明示され、大学における看護学教育の質保証が進められてきた。その後、看護系大学の急増と看護学教育に対する社会的要請の高まりを受け、平成 27 (2015) 年～29 (2017) 年度には「大学における医療人養成の在り方に関する調査研究委託事業」(千葉大学に委託)として、学士課程における看護

実践能力と卒業時到達目標の達成状況の検証・評価方法の開発が行われている。直近では、平成28(2016)年10月に文部科学省高等教育局に「大学における看護系人材の養成の在り方に関する検討会」が設置され、平成29(2017)年10月に「看護学教育モデル・コア・カリキュラム～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標～」が取りまとめられ、文部科学省高等教育局医学教育課のホームページ上で公開されている。この改訂では、上述の医学分野からの提言を受け、「チーム医療等の推進の観点から、医療人として多職種と共有すべき価値観を共通で盛り込み、かつチーム医療等の場で看護系人材が独自に担わなければならないものも盛り込んだ」とされている。

4) 看護学教育モデル・コア・カリキュラム

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1397885_1.pdf (平成30年3月12日アクセス)

4. 管理栄養士・栄養士のための栄養学教育モデル・コア・カリキュラムの検討の基本方針

以上の経過と他職種の検討動向をふまえ、厚生労働省から、平成29年度および30年度「管理栄養士専門分野別人材育成事業（教育養成領域での人材育成）」として、日本栄養改善学会が委託を受け、管理栄養士・栄養士養成のための栄養学教育モデル・コア・カリキュラムの検討を行うこととなった。

今回の検討に当たり、厚生労働省より提示された基本方針は以下の通りである。

- ① 社会状況の変化、多様化・高度化する社会や国民の多様なニーズに対応できる管理栄養士・栄養士のめざす姿を明らかにし、それをふまえること。
- ② 栄養士法の改定を伴うものではないので、現在の栄養士法の規定をふまえること。
- ③ 全国の管理栄養士・栄養士養成施設における教育カリキュラムと学位等の現状分析（大学院を含む）をふまえること。
- ④ 他の保健医療職のモデル・コア・カリキュラムを視野におくこと。
- ⑤ 栄養士養成（2年間）、管理栄養士養成（4年間）、大学院での高度人材養成（管理栄養士+2年間）の3タイプの栄養学教育モデル・コア・カリキュラムを作成すること。
- ⑥ 栄養士のモデル・コア・カリキュラムは、管理栄養士のモデル・コア・カリキュラムに包含されるものとする。
- ⑦ 「コア」は、全教育カリキュラムの6割程度を目安に精査する。それにより、残りの4割を各養成施設の特徴を出すための教育内容に当てることを可能とすること。

以上である。

5. 管理栄養士・栄養士養成のための栄養学教育モデル・コア・カリキュラム検討の経過

以上の基本方針をふまえ、平成29年度は各種の調査を実施し、教育養成の現状を整理し、管理栄養士・栄養士のめざす姿を検討して、「管理栄養士・栄養士の期待される像」を示した。その上で、管理栄

養士に求められる基本的な資質・能力の整理と、その養成のモデル・コア・カリキュラムの大枠を検討した。

平成30年度は、平成29年度の検討結果を受け、管理栄養士、栄養士、および大学院レベルの高度人材について、具体的なモデル・コア・カリキュラムの検討を行った。検討に当たり、前述の基本方針に照らし、栄養士法の規定の基礎分野を除く単位数の6割程度となるように項目を精選した。その際、「コア」以外となる教育内容を考え、比較対照しながら選定を行った。栄養士のモデル・コア・カリキュラムは、管理栄養士のモデル・コア・カリキュラム案を受けて、検討を進めた。

管理栄養士・栄養士の栄養学教育モデル・コア・カリキュラムの考え方

1. 管理栄養士・栄養士の期待される像（キャッチフレーズ）

「栄養・食を通して、人々の健康と幸福に貢献する」

管理栄養士・栄養士に共通して期待される像を、明瞭簡潔に表現するキャッチフレーズとした。栄養学を基盤とし、栄養・食を手段として、さまざまな人々の健康はもとより、より広義の well-being に寄与する専門職であることを、明瞭簡潔に表現した。

管理栄養士・栄養士の基盤となる学術は栄養学である。医師においては医学が、看護系人材においては看護学が、薬剤師においては薬学が基盤となる学術であることと同様である。したがって、本モデル・コア・カリキュラムでいう栄養学は、様々なライフステージおよび健康状態にある人々の栄養の営みを対象とし、ヒトに関わる領域（栄養生理学、栄養生化学など）も、食品に関わる領域（食品学、調理科学など）も、その関係性や実践に関わる領域（栄養疫学、栄養教育など）も、すべて含む広義な概念として栄養学をとらえ、モデル・コア・カリキュラムを作成した。

2. 管理栄養士・栄養士の栄養学教育モデル・コア・カリキュラムの概念図

管理栄養士・栄養士の栄養学教育モデル・コア・カリキュラムの全体構成を以下の通りとした。

- A 管理栄養士・栄養士として求められる基本的な資質・能力
- B 社会と栄養
- C 栄養管理の実践のための基礎科学
- D 食べ物をベースとした栄養管理の実践
- E ライフステージと栄養管理の実践
- F 疾患と栄養管理の実践
- G 1 給食の運営に関する総合実習
- G 2 栄養管理の実践のための統合実習
- H 栄養学研究

これらの相互関係、および基礎教養科目や、各養成施設が教育理念に基づいて実施する独自の教育内容との関係を管理栄養士・栄養士共通の概念図として次頁に示した。

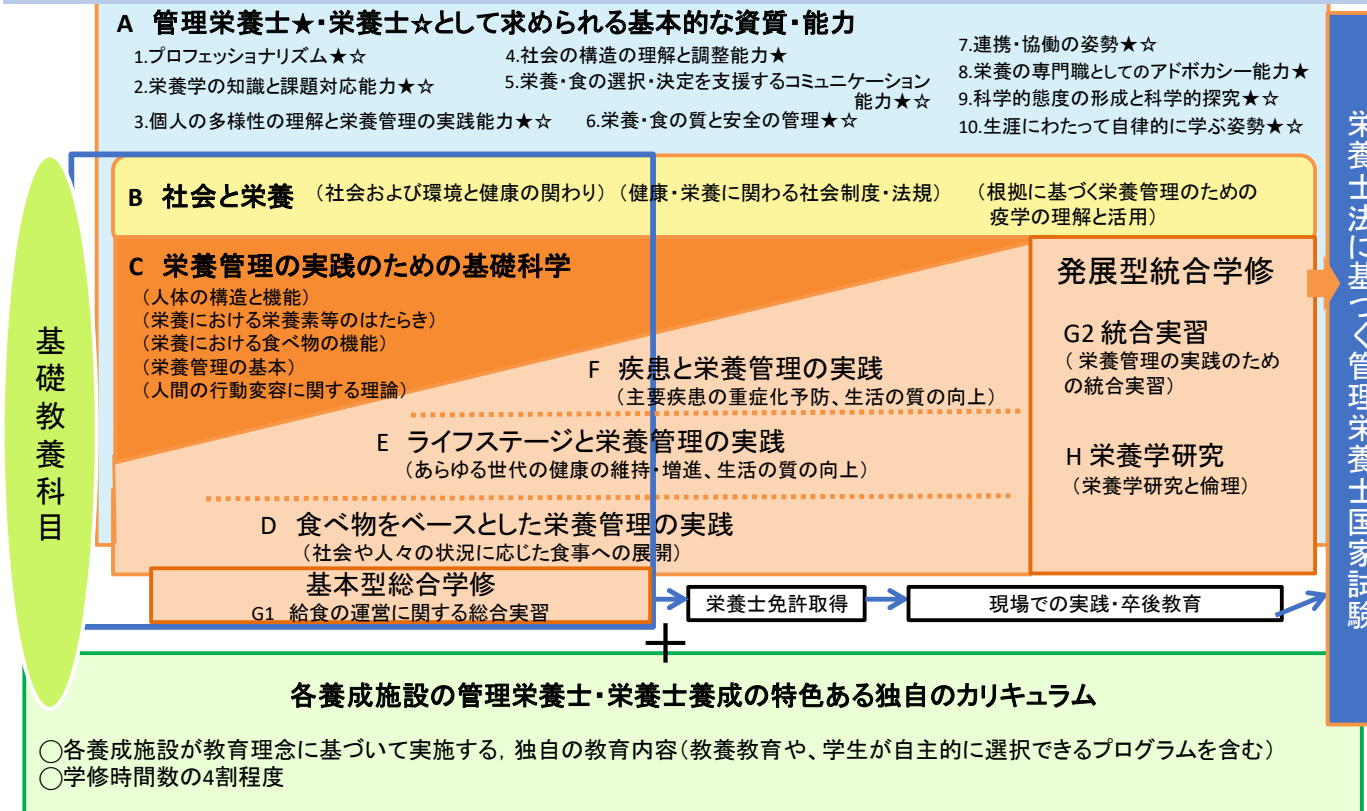
上部に管理栄養士・栄養士として求められる基本的な資質・能力（A）を位置づけた。管理栄養士に該当するものに★、栄養士に該当するものに☆を付け区別した。これらの資質・能力の獲得に関わる教育内容としてB～Hがある。左から右へ、基礎的な内容から総合的、統合的な内容へと学修が発展する。栄養士に該当する部分を左半分の青枠で囲み、栄養士免許取得後に、現場での実践・卒後教育を経て、管理栄養士国家試験へと至る道筋を示した。栄養士では、Dが最も大きい割合で、E、Fと小さくなるのに対し、管理栄養士では、Fが大きな割合を占める表現とした。管理栄養士では、最終的に、G 2の臨地実習

を含む統合実習と、H栄養学研究の教育内容の修得をもって、体系的な学修となるようモデル・コア・カリキュラムを構成した。

管理栄養士・栄養士の栄養学教育モデルコアカリキュラム(平成30年度作成) 概要

- 学生が卒業時まで身に付けておくべき、必須の実践的能力(知識・技能・態度)を、「ねらい」と「学修目標」として明確化
- 学修時間数の6割程度を目安としたもの
- 「管理栄養士・栄養士として求められる基本的な資質・能力」として、ミニマム・エッセンスである項目を記載

「栄養・食を通じて、人々の健康と幸福に貢献する」管理栄養士・栄養士の養成



3. モデル・コア・カリキュラムの趣旨と養成施設の教育における活用

1) モデル・コア・カリキュラムの趣旨

本モデル・コア・カリキュラムは、管理栄養士・栄養士養成のための教育において共通して取り組むべきコアとなる内容を抽出し、各養成施設におけるカリキュラム作成の参考となるよう学修内容を列挙したものである。

もとより、養成施設におけるカリキュラム構築は、各分野の人材養成に対する社会的要請や学問領域の特性等を踏まえつつ、各養成施設が建学の精神や独自の教育理念に基づいて自主的・自律的に行うべきものである。本モデル・コア・カリキュラムは、管理栄養士・栄養士養成教育の充実と社会に対する質保証に資するため、学生が卒業時まで身に付けておくべき必須の実践能力について、その修得のために必要な具体的な学修目標を、管理栄養士・栄養士養成施設関係者をはじめ、広く国民に対して提示することを目的として策定されたものである。

なお、本モデル・コア・カリキュラムについては、社会のニーズの変化、栄養系人材に求められる専門知識・技術等の変化などに伴い、必要に応じて見直しを行い、改訂することが必要である。

2) 養成施設における活用

各養成施設がカリキュラムを編成するに当たっては、学修目標だけでなく、学修内容や方法、学習成果の評価の在り方等も検討課題となる。本モデル・コア・カリキュラムは、カリキュラムの枠組みを規定するものではなく、授業科目等の設定、教育手法、履修順序等を含めカリキュラムの編成は各養成施設の判断により行うものである。各養成施設においては、カリキュラムの編成や評価の過程において、本モデル・コア・カリキュラムの学修目標を参考として活用することを期待する。

本モデル・コア・カリキュラムの策定に当たっては、最終的な学修目標はいわゆるコンピテンシーの獲得を目的とした記載とするとともに、各養成施設における学修時間の3分の2程度で履修可能となるよう精選した。

各養成施設においては、本モデル・コア・カリキュラムが提示する学修目標を包括するとともに、特色ある独自のカリキュラムを構築することが期待される。

なお、栄養学およびその背景にある学問や科学・技術の進歩に伴う新たな知識や技能について、すべてを卒前教育において修得することは困難であり、生涯をかけて修得していくことを前提に、卒前教育で行うべきものを精査することが必要である。

栄養学教育においては、栄養学研究への志向を涵養する教育や、栄養学関係者以外の声を聴く等の授業方法の工夫など、各養成施設において特色ある取組や授業内容の改善に加え、これらの実現に向けた教職員の教育能力の向上や、臨地実習を想定した教員の実践能力の向上が求められる。また、栄養学の視点で科学的探求のできる人材の育成や批判的・創造思考力の熟成、専門職としての高い倫理性、職業アイデンティティの確立、研究や臨床で求められる情報収集能力、読解力の育成、対人関係形成能力の基礎となる、自らをよく知り、自己を振り返る内省、自己洞察能力の強化が求められている。